

芸術とオリンピック・断章

太田 圭

人間総合科学研究科助教授

山中湖畔にて

夏も終りに近づく頃、数日間を初めて山中共同研修所で過ごした。山中湖を巡る道路の入口から玄関までは軽井沢の別荘地のような雰囲気。驚いたことに庭先の小扉のすぐ先には湖の“プライベートビーチ”。眼前には富士山がそびえ、湖面には「逆さ富士」が映っていた。気温も20度台で残暑とは無縁。好天にも恵まれ、久しぶりに避暑気分浸った。

今回は2学期に開講する「世界的蹴球文化論」の担当教員とリーダー的な役割を果たすことになる学生による合宿で、様々な学群・学類・大学院の学生が参加したが、途中から今春就職したOBも加わり、賑やかに盛り上がった。また、折しもアテネオリンピックの真っ最中、話題は終日スポーツと言っても過言ではなかったが、テレビ画面に映されるスポーツの超人たちを眺めながら、私は一学期に講義した「オリンピッ

クと芸術」を振り返っていた。

知られざるメダリスト画家

今回の第28回アテネ大会は、オリンピックの故郷に還る形で行われている。総合科目でもオリンピック関連の科目として「祝オリンピックの帰還」が開講され、私もそのうちの1回を「オリンピックと芸術」と題して担当した。

授業では、オリンピックに「芸術競技」があり、日本人の銅メダリストがいたことを知っている学生は皆無に等しかった。が、かく言う私も、9年程前の「ベルリン五輪絵画部門で銅－幻の作品、アトランタへー」という見出しの新聞記事がきっかけで、さらに強く興味を持つに至ったので、さほど驚かなかった。

さて、近代オリンピックの芸術競技はクーベルタンの提唱により、1912年の第5回ストックホルム大会からプログラムに加

えられ、1948年の第14回ロンドン大会まで断続的に7回開催されたが、日本は1932年の第10回ロサンゼルス大会と1936年の第11回ベルリン大会の2大会に“出場”した。

記事によれば、ベルリン大会の芸術競技で銅メダリストになったのは日本画家、藤田隆治(1907～1965)で、作品『アイスホッケー』で受賞し、一躍脚光を浴びたという。作品はナチスドイツに買い上げられた後、戦災で焼失したので、弟子の笠青峰氏が残された写真を手がかりに出品作を復元し、その作品を携えて翌年の五輪会場となるアトランタで個展を開くというものであった。

ベルリン大会では、もう一人の日本画家、鈴木朱雀(1891～1972)も作品『古典的競馬』で銅メダリストになった。また、彫刻部門で長谷川義起(1891～1974)の『横綱画構』、音楽部門で江文也(1910～1983)の管弦楽曲『台湾の舞曲』もそれぞれ褒章を受賞した。

しかし「芸術競技」は審査基準や参加資格、作品管理などの問題から廃止され、その後は「芸術展示」、「文化プログラム」と変遷し継続されている。

ところで、アテネ大会に先立ち開催されたはずの「オリンピック・スポーツ&アートコンテスト2004」はどのように実施されたのだろうか。スポーツ・文化・環境の一体化で成立するはずの“オリンピック・ムーブメント”は、メディアの中では見事にア

ンバランスな印象を受ける。

見えざる芸術家の“五輪出場歴”

芸術家にとっての活動記録は画集などに記載されることが多いので、そこに手がかりを求めようとするが、現実には厳しく、参加した画家全員に画集がある訳ではない。しかも、いわゆる有名な画家であっても五輪参加の事実が記載されていない。なぜだろうか。

これは、「メダリスト」や「入賞者」にならなかったこともあるだろうが、作品の出来具合に納得が行かず、あえて記録から消したからかもしれない。

—芸術家は皆、かなり負けず嫌いである。

それでも数人の画歴にはオリンピックとのかかわりが記載されていた。

小杉放菴(1881～1964)は1927年(昭和4年)に制作した『蹴球構図』(別の資料には『ラグビーの一構図』とも)をロサンゼルス大会に出品しているが、日光にある小杉放菴の美術館蔵の写生帳には、風景や人物の他、相撲、野球、ダンス、バレエ、スキー等のスポーツの他、子供の遊び(棒登り)などが描かれており、画家の自由な感覚や、当時の様子もわかり興味深い。

自らも相撲を取り、後年には横綱審議会委員にもなった彫刻家、石井鶴三(1887～1973)は、ベルリン大会に版画を出品した

が、「彫刻は塊の芸術である。彫刻的に見れば、力士は動く塊である」から、「相撲を愛好する我々としては、相撲を絵画彫刻の題材として取り入れることになるのは、自然の勢いである」とエッセーに残している。

現在、2大会の五輪出品作家全員を対象に、作品や画歴等を探索しているが、1930年代の不安定な世界情勢という時代背景とともに百様百態のドラマが見え隠れしている。

“画家”でオリンピック選手

今回のアテネ大会のクレール射撃の女子ダブルトラップ競技で5位に賞した選手が、音楽大学出身であることでも話題になったが、過去にも芸術とかかわりのある選手が出場した例があった。

1932年のロサンゼルス大会の体操競技に出場した角田不二夫(1911～1938)で、選手名簿の職業欄は「画家」であった。

「画家で体操選手?…まさか!」。私は興味を抱きながらも未だに半信半疑で調べているが、選手としての実績は公式報告書で把握できたが、画家としてはこれまでのところ「アサヒスポーツ」という雑誌の表紙絵を描いていたことが判明している。

角田は1936年のベルリン大会にも2大会連続で出場しているが、その時の名簿には「画家」ではなく、ある私立中学卒業の学歴が記載されていた。また別の専門学校名が

書かれている資料もあった。両校には照会中だが、前者は卒業生名簿に名前が見えないこと、後者は施設利用の会員ではないかとの回答を得ている。真相究明のためにしばらくは情報交換をすることになりそうである。

訳あって五輪後に夭折した角田だが、第二次世界大戦前の不安な時代に、ある部分では対極にある、芸術とスポーツの狭間に生きた人生があったように思う。

この件では、はからずも日本体操史をひもとくことになったが、初参加となったロサンゼルス大会では、日本チームはいわば惨敗であったというが、その後の世界レベルへの猛追による1952年の第13回ヘルシンキ大会以降の日本体操界隆盛のための礎として、大変意義のある参加と結果であったという評価である。これらの歴史を知ってから、アテネでの男子団体の金メダル獲得シーンを見ると、山も谷も知り尽くした日本の体操関係者の熱い思いが、70年以上も脈々と伝えられ、再び成果となって表れたのだと感じた。

余談になるが、当時の競技会は屋外で行われ、つり輪には「七字懸垂」という力技があったことも知って驚いた。今流行のテレビ番組のネタの宝庫のようである。

また、五輪後に小説を書いた選手としてはロサンゼルス大会の漕艇クルーの一員で

あった田中英光(1913～1949)がいる。参加の8年後に、選手として渡米した船の中で出会った走り高跳びの女子選手への恋情を告白する形の小説、『オリンポスの果実』を『文学界』に発表した。

『美と力』の与えしもの

オリンピックの芸術競技出場者ではないが、日本画家、長谷川路可(1897～1967)は五輪と深い関係がある。日本スポーツの「聖地」、国立競技場メインスタンド両脇の壁画の作者である。それはモザイクによるもので、1964年の第18回東京大会に合わせて制作された。画題は東京オリンピックのテーマと同じく『美と力』である。スタンドに向かって左が「野見宿禰」という相撲の元祖で、右がアテネ五輪のメダルの表のデザインにも採用されている「勝利の女神(ニケ)」である。

ニケ像と言えば、ルーブル美術館にある「サモトラケのニケ像」は頭部も手も欠けているが、詩人のリルケが、「この彫像は恋人に向かって進んでゆく美しい娘の動きを我々に伝えたというだけではない。それは同時にギリシャの風、その拡がりと輝やかさとの永遠の像なのだ」と讚美した。

私は今年も全日本大学サッカー選手権の決勝戦で競技場を訪れ、応援はもちろん、壁画と再会するのを楽しみにしている。(今

年は筑波大の3連覇がかかっている。がんばれ蹴球部!!)

つくばにて

合宿の帰路、独り山中湖畔の三島由紀夫文学館を訪れた。三島にとってギリシアは「眷恋の地」であり、殊に有名な彫刻のミュロンの『円盤投げ』を、「世界で最も青年らしい青年像」と評したことを授業でも紹介した。静かな館内には幼少時代の作文から、作家活動終焉までの原稿の他、草稿や取材ノート等の資料が展示されており、時の経つのも忘れて読みふけてしまった。

翌日、その「円盤投げ」と前述の「サモトラケのニケ」の石膏像のある芸術専門学群の大石膏室を渡り廊下から覗いてみると、蒸し暑い中でデッサンに励んでいる数人の学生が見えた。

芸術はある意味で「自分自身との我慢比べ」でもある。歩む道は「未知」で、引退もなく、制作は永遠に続く。

私は思わず、「ひたむきに努力する君も立派なメダリストだ、頑張れ」と心の中でエールを送った。

オリンピックが終ると、いよいよ秋の公募展のための制作が山場を迎える。

(おた けい/日本画)